

## ふれあい遊びを通して子どもの育ちを考える

仲野悦子・小川博久\*

### Children Growth through Interaction

Etsuko NAKANO, Hirohisa OGAWA

#### 要旨

本研究は、子ども一人ひとりが生き生きと遊ぶために領域「人間関係」に視点を置き、より幅広い子ども同士の関係を豊かにする「ふれあい遊び」を園内研究として保育活動の中に展開し、遊びの工夫や子どもの発達に応じた適度な働きかけ、それに伴う環境構成や保育士の援助のあり方を追究してきた。年間計画に沿って0歳児から6歳児までの子どもを対象に、同年齢や異年齢など活動方法を考え実践してきた結果、それぞれ年齢を越えて触れ合うことができ子ども達も保育者も大きく成長した。「異年齢児と関わる(友達を思いやる)力」「積極的に関わる(自ら関わる)力」が育ち、反対に、「決まりの大切さに気付き、守って遊ぶ力」に対しては、今後の課題として残った。継続的に行うことで願う力が育ち、子ども・保育者同士が共感することで遊びが発展し、個々を大切にしながらも集団への働きかけが社会性を培う。

キーワード：ふれあい 遊び 共感 乳幼児 異年齢

#### 1 研究目的

今、子ども達を取り巻く環境が激変していると言われている。自然環境の変化、社会環境として地域社会、家庭や家族、学校、情報社会による文化環境など、様々な環境の中で子どもの発達の道筋や親の子育てに対して多くの疑問が投げかけられている。<sup>(註1)</sup> 一方、幼児教育の課題として小学校との連携が望まれるといわれて久しい。しかし、今「小1プロブレム」という言葉が常に耳にするということは、子ども達の発達や人との関わりなど、社会性が乏しくスムーズに小学校に移行されていないということになる。<sup>(註2)</sup> また、家庭においては虐待や貧困など子育てに対して多くの課題が叫ばれている。<sup>(註3)</sup>

このような子ども達を取り巻く状況下の中で、N保育園は朝礼や日々の保育の中で常に0歳児から6歳児までの子ども達を対象に年齢を越えた関わりを実践している。特に7月から8月の約1か月間、3歳以上児を対象に通常3歳・4歳・5歳の3クラスを2クラスに縦割にして、登園した時から1日過ごしている。この活動は年齢を越えた子ども達同士つながりをより深め、お互いを理解する、様々な力を獲得する学びの場になっている。朝礼時には未満児の子ども達を巻き込んだ保育活動も常に実践し、豊かな人との関わりを目指している。園内研究として、平成10年度から5年間にわたって「異年齢のかかわり」を1期から4期に分けて計画的に実践してきた。<sup>(註4)</sup> 平成18年度から5年間は、「健康」の領域に視点を置き、「運動遊び」を継続的に行い、子どもの運動能力を伸ばすとともに友達との豊かな関わりを育む実践をしている。この結果、子ども達の中に〈やりたい〉という意欲が高まり、友達を誘いあい一緒に遊ぶ姿が多く見られるまでに成長してきた。<sup>(註5)</sup>

\* 新生保育園

さらに、23年度から26年度までの4年間は、子ども一人ひとりが生き生きと遊ぶために「人間関係」の領域に視点を置き、「ふれあい遊び」を園内研究として取り組み、保育活動の中に展開していった。この一連の活動を通して、より幅広い子ども同士の関係を豊かにするための遊びの工夫や子どもの発達に応じた適度な働きかけ、それに伴う環境構成や保育士の援助のあり方を追究している。保育者と子ども、同年齢及び異年齢の子ども同士の触れ合い活動を、意図的・計画的・継続的に実践することによって、人間が本来持っている「思いやり」「穏やかな心持ち」「人へのいたわりと尊重の気持ち」なども自然に芽生えるであろう。そのことによって、集団の絆が深まり、みんなで遊ぶことの面白さや楽しさを共感することができる。これまでの研究にも、「ふれあい遊び」の中の「集団遊び」として鬼ごっこやわらべ歌を取り入れた遊びが多く見られる。遊びの展開過程において、保育者の見通しを持った指導が伝統的な遊びから創造的な遊びに発展することがあるとしている。また、異年齢集団によるふれあい遊びにも注目し、双方向的展開の中で手をつなぐことの意味や効果を上げている。年齢を超えた交流により手や体を触れ合うことによって、安心感や身体感覚が伝わり、誰もが親しめるふれあい遊びが子どもの感性に有効であると示唆されている。

ここで、子ども自身が主体的・意欲的に生き生きと遊ぶ子どもの育ちを目指して実践してきた「ふれあい遊び」の事例をもとに、子どもの発達や保育のあり方、保育者の役割を考えていきたい。

## 2 研究方法

### 1) 実践園

S保育園は、中部・東海地域にあり、昭和56年開園以来34年を迎えた私立の認可保育園である。乳児から就学前までの園児（現在定員90名）と18名の職員で構成されている。園の保育目標として「つよく」（心身と共に健康で意欲的な行動）・「思いやり」（自己の精神面の陶冶と他者への気配り）・「ほがらかに」（子どもの特性で純真さ、明朗性自由闊達な行動）を掲げ、異年齢児保育を通して年齢を超えた関わりを大切にしている。平成3年以来24年間、幼年体育指導を年間計画に取り入れられるなど、子ども達の精神的発達と体力の向上を図ってきた。

### 2) 対象者

① 対象保育者；園長および主任保育士を含む常勤・非常勤保育士15名

（H23～H26年の4年間、研究に関わった保育士20名）

②対象園児；園児379名（4月当初人数）

平成23年度：97名、平成24年度：98名、

平成25年度：97名、平成26年度：87名、

### 3) 研究における視点及び方法

#### ①視点

領域「人間関係」より、子ども達に身に付けて欲しい力、育って行って欲しい力を設定した。

ア) 積極的に関わる(自ら関わる)力

イ) 共感しあう力

ウ) 協力してやり遂げる力

エ) 異年齢児と関わり、友達を思いやる力

オ) 決まりの大切さに気づき、守って遊ぶ力

#### ②方法

\*活動方法 → 「歌・体操年間計画」の中に、歌やリズム体操と同じ並列的な活動として「ふれあい遊び」を取り入れ、計画的に実践した。(表-1参照)

- ア) 園全体における朝の会において、年間計画に沿って毎月1つの「ふれあい遊び」を取り入れ楽しむ。
- イ) 異年齢児との関わりを通して遊びを楽しむ。
- ウ) クラスの保育の中にも取り入れ、同年齢との関わりを深める。
- エ) 祖父母の方との触れ合い活動を通して関わりを広げる。

今までの年間計画を見ると、4年間同じ遊びをしている活動が「はな、はな」や「じゃんけん列車」など9種類あり、未満児の子ども達にも楽しめる、動きやすく分かりやすい遊びとなっている。平成25年度からは、9月は運動会の練習などで、なかなか取り組むことができず、8月の「げんこつ山のたぬきさん」を継続することで実態に沿った計画とした。10月からは4年間同じ内容の遊びが実践されてきた。

表1 <ふれあい遊び>年間計画

年度/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
H23	はな、はな	おーちた おちた	なんて 鳴くの	なべなべ 底抜け	猛獣狩り	忍者でにん!	人間トンネル	ボール繋ぎ 競争	ムカデ競走	しゃがみ相撲	おしくら まんじゅう	じゃんけん 列車
H24	はな、はな	おーちた おちた	エネルギー ビリビリ	なべなべ 底抜け	げんこつ山の たぬきさん	忍者でにん!	人間トンネル	ボール繋ぎ 競争	ムカデ競走	しゃがみ相撲	おしくら まんじゅう	じゃんけん 列車
H25	はな、はな	おーちた おちた	エネルギー ビリビリ	なべなべ 底抜け	げんこつ山の たぬきさん	→	人間トンネル	ボール繋ぎ 競争	ムカデ競走	しゃがみ相撲	おしくら まんじゅう	じゃんけん 列車
H26	はな、はな	おーちた おちた	猛獣狩り	なべなべ 底抜け	げんこつ山の たぬきさん	→	人間トンネル	ボール繋ぎ 競争	ムカデ競走	しゃがみ相撲	おしくら まんじゅう	じゃんけん 列車
ねらい	・寝散と俊 歌性を身に 付ける。 ・積極的に 自ら関わる 力を身に付 ける。	・音楽を聞 き、それに 合ったボ ースを素早 くとること ができる。 ・共感し合 う力を身に 付ける。	・言葉を聞 き、その言 葉の文字数 に応じて素 早く人数を 集める。 ・協力して やり遂げる 力を身に付 ける。	・ペアの子 と息を合わ せて、背中 合わせにな ることがで きる。 ・協力して やり遂げる 力を身に付 ける。	・歌に合わせ、友達と一緒 にふれあって遊ぶことを楽し む。 ・異年齢児と関わり、友達 を思いやる力を身に付け る。	→	・大勢の友 達と一緒に 遊ぶ楽しさ を味わう。 ・決まりの 大切さに気 づき、守っ て遊ぶ力を 身に付ける。	・いろいろ な体制で ボールを相 手にしっか り渡すこと ができる。 ・協力して やり遂げる 力を身に付 ける。	・友達とつ ながり、手 を離さずに 進むことが できる。 ・協力して やり遂げる 力を身に付 ける。	・しゃがんだ 姿勢で、バラ ンスを取る ことができる。 ・積極的に自 ら関わる力を 身に付ける。	・バランス を保ち、姿 勢を立て直 すことができ る。 ・共感し合 う力を身に 付ける。	・ジャンプ の勝ち負け に素早く 反応し、動 くことができ る。 ・積極的に 自ら関わる 力を身に付 ける。

\*活動の観点、

- ア) 遊びの「ねらい」をしっかりとらえ、保育者同士が共通理解のもとで進めていった。
  - ・ねらいを達成するためには、どんなステップを踏んでいくのか。
  - ・その遊びをどう発展させていくのか。
- イ) 初めは、保育士との関わり（特に未満児）を深め、安心感をもてるようにし、次に、同一年齢、異年齢児との関わりへと広げていった。
- ウ) ふれあい遊びを通し、人間関係だけでなく、今までの研究で培ってきた運動能力も視野に入れ、運動面においてどのような力をつけるかという視点も考慮した。

3 結果

\*実践結果

1) 平成23年度～平成25年度の評価（表-2参照）

ふれあい活動は平成22年度より月ごとの計画に取り入れて実践してきたが、園内研究としては平成23年度から26年度の4年間である。毎月、子ども同士が触れ合える遊びを取り上げ、年齢を越えた遊びとして楽しんできた。結果的には、短い時間の活動でも継続的に行うことによ

子ども同士の関わりもスムーズに流れ、信頼関係も生まれ、遊びだけではなく日常生活の中にも異年齢の関わりも多く見られるようになり、いたわりや思いやりのある行動を多く目にする事ができた。

表2 評価と課題

年度	H23年度	H24年度	H25年度
評価	①計画的・継続的に取り組んだことで、友達との触れ合いを楽しむことができた。特定の友達だけではなく、クラス全員、そして異年齢児との関わりへと広げることができた。 ②子どもとの信頼関係を築く上で、“触れ合う”ことの大切さを再確認できた。	①保育士との関わりから同年齢、異年齢児と関わりを広げたことで、憧れや思いやり、いたわりの気持ちが自然と芽生えた。 ②短時間でも継続していくことにより、人との関わりが増え、更に信頼関係がうまれた。 ③保育士として子どもの実態から願う姿をイメージし、発達段階に応じた遊びを構成する意識が高まった。 ④子どもの実態に応じた関わりを意図的に取り入れたことで、子ども自身が関わり方を学び自ら関わりようとする姿につながった。	①段階を踏んで楽しんでいくことによって、様々なバリエーションで遊ぶことができ、遊びが深まった。 ②評価・反省を加えることによって、一つ一つの活動に対しての振り返りができた。 ③ふれあい遊びを通して、異年齢児との関わりが日常の中でも見られるようになった。
課題	①遊びに過度抵抗をつけながら意欲的・主体的に取り組める遊びへと発展させ、子ども自身が遊びを創り出せるような援助のあり方、環境構成を考え進めしていく。	①今後子どもが意欲的に生き生きと遊べる手助けをしていく。 ②研究だけに留まらず、更に継続することで人との関わりを増やすと共に思いやりの心を育てていく。③子どもが自発的・主体的に関わり、満足感や達成感を得られるような環境構成を工夫する。 ④計画・実践・評価(PDCA)のサイクルで保育を見直し、次の保育の課題へと活かしながら継続的に取り組む。	①クラスごとで計画的にふれあい遊びを取り入れ、遊びを深めていく。 ②年齢にあった遊び方 →未満児は保育者が様々な遊び方を提供して楽しんでいく。 →以上児は子ども達自身が考え、遊びを工夫して展開していく。

## 2) 平成26年度の評価 (表-3参照)

平成26年度は前年度の課題を基に継続的に実践することにした。

①クラスごとで計画的にふれあい遊びを取り入れ、遊びを深めていく。

②年齢にあった遊び方

→ 未満児は保育者が様々な遊び方を提供して楽しんでいく。

→ 以上児は子ども達自身が考え、遊びを工夫して展開していく。

③年齢別ごとに「クラスの実態」「願う姿」「具体的な取り組み」「評価反省」を設ける。

平成26年度はクラス毎に遊びをより深めた結果、子ども達自身の遊びに発展していった。異年齢同士の関わりにおいても、積極的に遊べるようになり年中児や年長児は未満児の子ども達を上手にリードして、一緒になって遊んであげたい気持ちが溢れていた。そして、新入園児も触れ合うことで徐々にクラスの輪の中に入り込み、誰とでも遊べるような信頼関係を築いていった。また、クラスで行うことによって特定の子どものみだけではなく様々な子どもとの関わりも深められ、遊びも浸透していった。子ども達はいろいろな遊びの中でも競争できる遊びを好み、子ども達同士で盛り上がり楽しんでいった。

表3 H26年度 年齢別の評価と次年度への課題

年齢 年度	H26年度	
	評価	課題
0・1歳児	少しずつ友達に興味が出始め、自分から関わろうとしたり、世話をしたりする姿が見られるようになった。	ルールが難しい遊びに対し、子ども達が楽しめるよう、いかに保育士が遊びを工夫し子ども達に提供できるか。
2歳児	保育士や友達とのスキンシップを喜び、日常からハイタッチなど自分から触れ合っている姿が増えた。	遊びが理解できるよう保育士が工夫していく中で子どもが内容を掴み、楽しめるようになっていきたい。
3歳児	朝の会だけでなくクラスでも行うことで遊びが浸透していった。また、友達と協力することを知った。	友達に目を向け、相手の気持ちを考えられるようにしていきたい。
4歳児	保育の中に取り入れたことで、特定の子だけでなく、様々な子と関わりが持てるようになった。ジャンケンや競争などの勝ち負けがある遊びが好きなようだ。	遊びを更に浸透させ、楽しむ。また、年長児に向けて自分達で考え、作り上げる楽しさを得られるようになってほしい。
5歳児	クラスでの活動にたくさん取り入れることができ、子ども達の中にも遊びとして浸透してきた。競争できる遊びを好んでいることが分かった。	鬼ごっこのように、自分たちでさらに遊びを展開させ、楽しめるようになってほしい。



3) 事例－1 「猛獣狩り」

グループで行う遊びなど、人数集めによく取り上げられる唱え歌である。未満児の子ども達には分かりやすいように、具体的に動物の絵カードや槍などを作り言葉を理解させる。以上児の子ども達は言葉から数字の意味を理解する。



\*ねらい

- ・言葉を聞き、その言葉の文字数に応じて素早く人数を集める。
- ・協力してやり遂げる力を身に付ける。

\*遊び方

- ①みんなで唱え歌を歌う。
- ②終わったら先生が「くま」「きりん」などの動物の名前を言う。
- ③子どもはその動物の文字の数だけ集まる。

\*年齢別における子どもの姿 (表－4参照)

子ども達に願う姿として、「数や文字に興味を持ち、様々な友達と積極的に関わられるようになって欲しい」とし、数や文字を意識的に考え、理解し、行動ができるように配慮した結果、年齢に応じた楽しみ方ができた。未満児では具体的な物を用意することで、言葉の意味をイメージすることができ、2歳児では3文字までは理解し友達集めをする姿が見られた。また、年長児では、獵師役にすぐに捕まると面白くないことから「10」を数えるうちに人数集めができないと捕えられてしまうという、子ども達が考えたルールに沿ってゲーム感覚で行った結果遊びが盛り上がった。このように年齢ごとに子ども達の実態に合った遊びを継続的に展開することで遊びが広がっていった。そして、保育の中に機会を捉えて行うことで、未満児の子ども達も数の理解や語彙も増え、「できる力」から「分かる力」が付き、より遊びが深まったと感じられた。

表4 事例－1 6月のふれあい遊び「猛獣狩り」

	0・1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
クラスの実態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・唱え歌のポーズを真似ようとしている子もいるが、何の遊びをしているかは理解できない。</li> <li>・保育士に顔を触れながら動物名を言われて、グループになっている事を喜んでいる子もいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2人ペアになることができる子がいる。</li> <li>・意味が分からず、手をつないでいる。</li> <li>・同じ友達と手をつなごうとしている。</li> <li>・遊びの展開についていけない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉に合わせて体を動かすことは楽しんでいるが、人数集めになるとできていない子がいる。</li> <li>・2人は分かるが、3人になると分からない子も出てくる。</li> <li>・仲の良い子と集まりたがる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・輪の会やクラス的活動の中に取り入れていることで、どの子も楽しんでいる。</li> <li>・人数集めでは、クラス内であるとすぐにペアを作ることができる。異年齢だとなかなか声を掛けられない。ペアを作った後に関わりを深められるよう、ふれあい遊びを取り入れている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉を聞いて、素早く人数が集まることできる。その反面、仲の良い子ばかりで集まる姿も良く見られる。(友達を選んでいる)</li> </ul>
願う姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達と集まることを楽しむ。</li> <li>・異年齢児に誘われることを楽しむ。</li> <li>・唱え歌を楽しむ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉と数のイメージが繋がるようにする。</li> <li>・2文字、できれば3文字までは理解できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数を知り、興味を持ち、数を理解しようとする。</li> <li>・誰とでも関わりが持てるようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・協力する大切さを知る。</li> <li>・数や文字に興味を持つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な友達と積極的に関わられるようになる。</li> <li>・進んで楽しめる活動となる。</li> </ul>
具体的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おもちゃの鉄砲と槍を使って猛獣狩りのイメージを伝え、唱え歌を楽しめるようにする。</li> <li>・動物名を言いながら集める子どもの顔を触り、一緒に座るように促す。</li> <li>・繰り返し遊ぶ中で、遊びの流れが分かり、いろいろな友達とグループになることを楽しめるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉と動物を描いたパネルを用意し、イメージしやすい。</li> <li>・3文字までは理解できる子もおり、分からない子も保育士が援助することで、自分から友達を探し手をつなごうとする姿が見られた。</li> <li>・朝の会や帰りの会などの空いた時間に繰り返し遊び込むようにしていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おやつ時間や普段の保育から数を知らせていく。</li> <li>・ふれあい遊びを多く取り入れ、まずはクラスの子から誰とでも関われるようにしていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス内で集団遊びをする際に取り入れていく。また、歌を歌ったり、違うふれあい遊びを盛り込むことでさらに関わりを深められるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・空いている時間を見つければほとんど行っている。</li> <li>・子ども達同士で進めることで、より楽しさを味わえるようにしていく。</li> <li>・新しいルールや遊び方を考え更に楽しい活動となるようにしていく。</li> </ul>
評価反省	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝の会や帰りの会で遊びをする余裕がなく、クラスで続けて行うことが難しかった。それでも、唱え歌を楽しむ子が増えて、グループになることを喜んでる姿があった。グループになったあとにハグしたり、くすぐったりすることでさらに楽しめるようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やりや鉄砲を用意することで、言葉の意味と物のイメージがつかうようにした。</li> <li>・3文字までは理解できる子もおり、分からない子も保育士が援助することで、自分から友達を探し手をつなごうとする姿が見られた。</li> <li>・手をたいたり、やりや鉄砲のポーズをしたりと歌を覚え真似をし、楽しんでいた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数を意識することで、自分たちで後一人と気付けるようになってきている。今後とも数を意識できるようにしていきたい。</li> <li>・自分のクラスで行うとすぐに人数集めができるが、異年齢になると保育士の所に来て不安そうにする姿がある。自分から相手を探すことができないので、今後誰とでも関われるようになって欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集団遊びをする際、触れ合える場を提供するために「猛獣狩り」を行った。人数集めをする中で数や文字にも興味を持ち、自分たちで仲間を集める姿が見られた。人数を集めた後、違うふれあい遊び(なかよし(の歌))を歌うことで、さらに関わりを深めることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・猛獣狩りに兎っここの要素を加えていった。すぐに友達を見つけて仲間集めをしない和持師に捕まってしまうということで、素早く集められるようになった。しかし、早く集めることはかきりに気がついてしまい、同じ子や近くにいる子ばかりになる姿が見られた。どうしたら良いか?を考えたい。いろいろな子となるほうが良い。また、獵師役はすぐに捕まると面白くないとい、「10」数えるうちに人数集めができないと捕えられてしまうというルールで行った結果、すぐに人数集めをすることができ、獵師役はなかなか捕まえることができなかった。このようにゲーム感覚で楽しむことで、遊びを盛り上げることができた。</li> </ul>

## 4) 事例－2 「人間トンネル」

子ども同士でペアを組みトンネルを作ったり、一人ひとりがトンネルを作りその中をくぐっていく。未満児の友達でもなるべくくぐりやすいように工夫したり、グループごとで競い合うことで遊びを盛り上げることができる。



## \*ねらい

- ・大勢の友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。
- ・決まりの大切さに気付き、守って遊ぶ力を身に付ける。

## \*遊び方

- ①同数のチームに分かれ、縦に並ぶ。
- ②トンネルを作る。
- ③一番前の子からトンネルをくぐる。
- ④くぐり抜けたらすぐにトンネルを作る。
- ⑤全員がくぐり終わったら体操座りで待つ。

## \*年齢別における子どもの姿（表－5参照）

2歳児においてクラスで遊びを行うことが難しかった。トンネルをつくったりくぐったりするタイミングが理解できずに保育士の援助が必要であった。しかし、朝の会など以上児と未満児2人がペアを組んで一緒にトンネルを作ったりくぐったりすることで遊びを理解し、日を追うごとに安心して手を繋いでくぐる事が出来た。以上児で行う雑巾がけの時には、足トンネルを作りその中をくぐって楽しそうに雑巾がけを行っていた。また、リズム遊びの時にグループに分かれ競争した時には、どのようにしたら速く全員がくぐる事が出来るか考え、機敏に動いていた。

## 5) 子どもの好きなふれあい遊び（表－6参照）

「表－6」は子ども達の好きな人気のあるふれあい遊びである。

- ・『げんこつやまのたぬきさん』は、「♪～抱っこしてギュー、おんぶしてよいしょ」の擬態語の部分においてお互いに抱きしめ合ったり、背中合わせになったりして触れ合うことを楽しんでいた。
- ・『おーちたおちた』は、「なーにが落ちた」という言葉の掛け合いを子ども達同士で楽しむ姿が見られた。りんご・飴玉やカミナリなど食べる真似をしたり、おへそを隠したりするなど、瞬間的に判断して反応するといった緊張感が楽しいようであった。
- ・『ジャンケン列車』は、3歳以上児の子ども達が大好きな遊びである。ピアノや歌に併せて体を動かす事が大好きで、友達と繋がり手が離れないようにスリルを楽しむ姿があった。また、年少組はじゃんけんが分かり始め勝ち負けに興味を持った。しかし勝つために後出しすることもあった。何度やっても飽きないよう子ども達からのリクエストでよく保育

の中に取り入れ楽しむことができた。

- 『猛獣狩り』は人数集めの時によく取り入れていた。集まった後に鬼ごっこやふれあい遊びをしていた。
- 『人間トンネル』では様々なトンネル作りを楽しんでいた。この遊びも浸透しているようで、掃除の時間では足トンネルを作ってそのトンネルを雑巾がけて潜る姿が見られた。雑巾がけも遊び感覚で競争したりしていた。

表5 事例-2 10月のふれあい遊び「人間トンネル」

	0・1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
クラスの実態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園々に両足でトンネルを作って楽しんでいる。</li> <li>・保育士と手を繋いで作るトンネルを友達に通っていくのを楽しんでいる。</li> <li>・ルールの理解は難しいが朝の会で年長児と一緒にトンネルを作って順番に長いトンネルを通るのを楽しんでいる姿もある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育士の声掛けや援助により、2人組になってトンネルを作ることができている。</li> <li>・トンネルを作る手がだんだん下がってきてしまったり、手が届かずペアとの距離が近くなってしまい、人がくぐるスペースがうまく開けられずにいる。</li> <li>・トンネルをくぐることを楽しんでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トンネルをくぐることを喜び楽しんでいる。</li> <li>・トンネルをくぐって終わってしまう。すぐにトンネルを作ることができない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ルールを理解し、素早く2人組を作ることができている。</li> <li>・競争すると盛り上がり、どうしても1位になれるか、速くゴールできるかを一緒に考えたり、クラスで協力してやろうとする姿も見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊び方を理解しており楽しんでいる。</li> <li>・競争すると盛り上がり、どうしても1位になれるか、速くゴールできるかを一緒に考えたり、クラスで協力してやろうとする姿も見られる。</li> </ul>
願う姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間トンネルを潜り抜けるのを楽しむ。</li> <li>・保育士や友達とトンネル作ることに興味を持つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達とトンネルをくぐり抜けるまで、手を挙げたまま待っていられるようになって欲しい。</li> <li>・くぐり抜けたら、もう一度素早くトンネルを作れるようになって欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊びを理解して遊べるようになって欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育士や友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じる。</li> <li>・協力する大切さを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさんの友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じて欲しい。</li> <li>・ルールを守って遊ぶ力を身に付けて欲しい。</li> </ul>
具体的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスで朝夕の時間にトンネル遊びの時間を持つ。</li> <li>・定で作るトンネルや手で作るトンネルなど、いろいろなトンネルをくぐり抜けるのを十分に楽しむ。</li> <li>・保育士や友達とトンネルを作ることを十分に楽しむ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝の会以外の時間でもクラスの活動に取り入れる。</li> <li>・トンネルの最初と最後に保育士が付き、次に誰がトンネルをくぐるかを知らせる。また、トンネルをくぐり抜けたら同じペアともう一度トンネルを作るように声を掛け、スムーズに活動が進められるようにする。</li> <li>・繰り返し遊ぶことで、遊びを楽しめるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・繰り返し遊ぶ中でルールを知らせていく。</li> <li>・大きいクラスの子と行うことで遊びを理解できるようにしていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスの保育の中に取り入れていく。</li> <li>・人間トンネルのやり方を工夫し、様々な遊び方で展開していく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リズム遊びの際にもグループで競争したりしていく。(2人ペアのトンネルや1人のトンネルなどやり方を変化させていく。)</li> <li>・みんなで作戦を考えたりして協力して行えるようにする。</li> </ul>
評価反省	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスでトンネル遊びをする時間が持てなかった。戸外へ出る前に保育士が猫のポーズで作るトンネルになると、順番を待つのも楽しみなで潜り抜けていた。引き続き取り入れていきたい。また、朝の会で年長児とのペアでは安心して手を繋いでトンネルを作り、潜り抜けるのもスムーズになり十分楽しめていた。繰り返し遊ぶ機会を持ちたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育士の援助は必要だが、遊びを繰り返していくうちに、自分の番が来たらトンネルをくぐり、抜けたらもう一度ペアとトンネルをつくるという動きが理解できていた。</li> <li>・クラスだけで遊びを行うのは難しいように感じたが、大きい子と一緒にやることで遊びがスムーズに進み、楽しんで取り組んでいた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎日、繰り返し遊ぶことで遊びを理解することができた。また、大きい子と行うことでトンネルをつくるのが分かり、スムーズに遊べるようになった。競争を楽しむ姿もある。今後も楽しみたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊び自体を楽しんでおり、部屋で遊んでいる時子ども同士で遊びあう姿が見られる。雑巾がけをする際も子ども達で考え足トンネルを作り、その中をくぐって雑巾がけをする姿がある。異年齢児(5歳児)とも一緒に行ったことで動きが更に機敏になったように思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リズム遊びの1つとしてグループで競争したことでとても盛り上がった。どうしても勝てるか、速くできるかなどみんなで作戦を立てたり、保育士がアドバイスをするなどやる気になり更に盛り上がりがあった。子ども達の中にも遊びが浸透しているように思えた。好きなふれあい遊びの1つに入るのではないかなと思う。</li> </ul>

表6 子ども達の好きな遊び

年齢	遊び	子ども達の様子
0・1歳児	〈げんこつやまのたぬきさん〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育士との触れ合いを好む子や手遊びに興味を持っている子が多いことなどから、人気があった遊び。抱きしめ合った背中合わせになったりすることや、歌を歌いながら手を動かしたりすることを楽しんでいて、年齢の高い子は、友達同士で抱き合う姿も見られた。→少しずつ友達にも興味が出始め、自分から友達と触れ合うとする姿が見られるようになった。</li> </ul>
2歳児	〈おーちた、おちた〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「おーちた、おちた」の掛け合いを喜び、子ども達同士で楽しむ姿が見られた。</li> <li>・りんごや飴玉が落ちてきた時は、食べる真似をしたりと子ども達がアレンジして盛り上がる姿もあった。</li> </ul>
	〈げんこつやまのたぬきさん〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵本の前やちょっとした空き時間などに遊ぶことができるため、浸透していくのも早く、子ども達だけで楽しむ姿も見られた。</li> <li>・ジャンケン手の手の形を覚えるきっかけとなり、理解は難しかったが、友達とグー・チョキ・パーの手を出し合って楽しんでいた。</li> </ul>
3歳児	〈ジャンケン列車〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピアノや歌に合わせて体を動かすことが好きいため興味を持ち、子ども達からのリクエストで遊んだ遊びである。</li> <li>・友達と繋がりが、手が離れないようにスリルを楽しんでいた。</li> <li>・ジャンケンが分かり始め、勝ち負けに興味を持った。→勝つと先頭になれるため、勝つために後出しをすることもあった。</li> </ul>
4歳児	〈ジャンケン列車〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ジャンケンの勝負が楽しいようで、リクエストをする姿が多い。だが、盛り上がるにつれて速く走ったりふざけるなど危ない姿も見られる。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>〈猛獣狩り〉</li> <li>〈人間トンネル〉</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育の中でよく取り入れていたこともあり、楽しんで歌い、仲間を集めている。集まった後、友達や保育士とのふれあいも楽しんでいる。</li> <li>・遊びが浸透しており、掃除の時間では足トンネルを作り、そのトンネルを雑巾がけて通る姿がある。</li> </ul>
5歳児	〈ジャンケン列車〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ジャンケンで勝負することを楽しんでいる。</li> <li>・「ジャンケン列車やりたい」と言う声がよく聞かれる。</li> <li>・ジャンケンは楽しいが、列車になると走ったり手を離したりしてふざける姿が見られる。→列車もゆっくりできるように声をかけていった。</li> <li>・ジャンケン手の手の形を覚えるきっかけとなり、理解は難しかったが、友達とグー・チョキ・パーの手を出し合って楽しんでいた。</li> </ul>

## \* 保育者の学び（アンケート結果より）

今まで、ふれあい遊びを実践してきた10人の保育士に、遊びの成果を訊ねた。

問1 ① ふれあい遊びを行ってきた結果、子ども達に変化を感じられましたか。

感じる	やや感じる	ふつう	あまり感じられない	感じられない
5人	4人	1人	0人	0人

② 「ふれあい遊び」を通して子ども達に変化していった時はいつですか。

- ・年齢が上がるたびに自ら年下の子に関わろうとする姿が増えた時。
- ・関わり方が自然に優しくなったり、教えてあげる姿が見られるようになった時。
- ・ふれあい遊びだけではなく、友達と協力しようという気持ちが増えた時。
- ・特に、以上児の子ども達において、単に遊びを行うのではなく楽しもうとする姿が見られた時。
- ・未満児の中には自分に触れられることを嫌がる子もあったが、遊びを繰り返すことによって保育士や友達と触れ合って遊ぶことの楽しさや喜びが少しずつ感じられるようになり、自然に遊びに参加できるようになった時。
- ・年上の子どもに優しく誘ってもらったことを、年下の子に同じように誘っていた時。
- ・同年齢同士でふれあい遊びに親しみを感じ、自分から友達と一緒にやってみたり口ずさんで楽しんでいた時。
- ・朝の会やお帰りの時間など、未満児の子ども達同士でも関わりが増えていった時。
- ・2歳児クラスにおいても、友達同士の遊びを通して力加減を考えて遊べるようになった時。

殆どの保育士は子ども達の変化や成長を感じていた。また、子ども達は集団の中で友達同士の関わり方や力加減など、遊びを通して学んでいた。

問2 ① 子ども達に身に付けて欲しい力、育てあって欲しい5つの力の中で、最もよく育ったと思われる力を2つ選択してください。

- ア) 積極的に関わる(自ら関わる力) → 8人
- イ) 共感しあう力 → 2人
- ウ) 協力してやり遂げる力 → 1人
- エ) 異年齢児と関わり、友達を思いやる力 → 9人
- オ) 決まりの大切さに気付き、守って遊ぶ力 → 0人

結果的に殆どの保育士は、「異年齢児と関わる(友達を思いやる)力」(9人)と「積極的に関わる(自ら関わる)力」(8人)が育ったと感じていた。反対に、「決まりの大切さに気付き、守って遊ぶ力」に対しては、0人であり今後の課題として残った。

② 5つの力の5段階評定結果(表-7参照)

身に付けて欲しい力、育てあって欲しい5つの力を5段階評定したより詳細な結果である。全体に5つの力の差はあるものの育っていた。5段階評価の「感じられない」と評価した保育士は一人もいない。評価の低いイ)・ウ)・オ)のそれぞれの力は、<ふれあい遊び>だけではなく、常に保育の活動の中で意識的に子ども達に身に付けて欲



しい力でもある。今後この研究成果を基に、より一人ひとりの子ども達に身に付けられるように保育者は意識する必要がある。社会の一員として身に付けなければいけないこと。人との関わりの中で必要とされるこの力を、特に年長児をはじめとする以上児の子ども達に、保育者は意識的に働きかけをすることが大切であると感じた。

表7 育ってほしい5つの力における5段階評価結果

育A2:F7てほしい力	感じられない	あまり感じられない	ふつう	やや感じる	感じる
ア 積極的に関わる(自ら関わる)力	0 人	0 人	3 人	2 人	5 人
イ 共感しあう力	0	2	2	6	0
ウ 協力してやり遂げる力	0	0	6	3	1
エ 異年齢児と関わり、友達を思いやる力	0	0	1	5	4
オ 決まりの大切さに気付き、守って遊ぶ力	0	0	7	3	0

### 問3 「ふれあい遊び」に対して保育者としての配慮や工夫

- ・友達に興味を持ち、一緒に遊ぶことを楽しめるように、保育士自身も子ども達と一緒に楽しむように心掛けた。
- ・様々なクラスの子と関わられるようにするために、意図的・計画的に進めていった。
- ・遊びのルールを子ども達が考え、展開できるようにし実践していった。
- ・積極的に関われるよう、＜猛獣狩り＞の仲間集めに取り入れグループ集めをしていった。
- ・嫌がっている子に対してその子の気持ちを思いやって、その都度保育士が仲立ちとなり言葉がけをして一緒に参加し関わられるように心掛けた。
- ・無理強いせず、「触れ合うことの抵抗」を受け止めるようにした。(どのようなときに嫌なのか、どのような時に気持ちが良いのか、保育者自身で感覚を味わい受け止めた)
- ・それぞれの「ふれあい遊び」を上は6歳、下は0歳の子どもにどうやってやれば同じ遊びを楽しめるかを考えながら行った。特に、力加減の違いなどを子ども達に知らせ、年下の友達にふれあう方法などを伝えた。
- ・遊びを理解している年長児を中心に、活動が盛り上がるように言葉がけや進め方を考えた。
- ・普段の保育の中であまり関わりのない子ども同士でペアを作るようにした。
- ・0、1歳児対象のクラスの子供達にはルールを簡略したり、楽しく遊びができるように工夫した。遊びを伝える時には、言葉を選んで子どもに分かりやすく話した。
- ・2歳児という年齢では、子ども達から自ら楽しむことが難しい遊びもあったが、繰り返し行うことで覚えていったり、友達と一緒に楽しむ楽しさ（＜なべなべそこぬけ＞では人数を少しずつ増やしたり、最後は全員で行う）を感じたりした。また、実際に絵カードや小道具を使うことで視覚的に理解できるように工夫した。

### 問4 「ふれあい遊び」を通して学んだこと

- \*＜継続することの大切さ＞を学ぶ。
- ・継続することで、育てたい力が身についていった。
- ・継続することで大きい子は自分達だけが楽しむだけでなく、小さい子を気遣って行動したり、やさしい言葉を掛けてあげたりなど自然にできるようになった。小さい子は大きい子の真似をしたりしてできるようになった。

- ・継続することで、今年度できなかったことが次年度できるようになり、一緒に喜ぶことで達成感が味わえた。
- ・朝の会などでは、継続的に短時間でメリハリをつけて行う方が子ども達は集中した。
- ・未満児の子ども達には難しいと思っていたことでも、繰り返し遊ぶことで自分達同士楽しむ姿もあり、繰り返すこと、遊び込むことの大切さを改めて知った。
- \*＜異年齢での関わりの大切さ＞を学ぶ。
  - ・大きい子との思いやりのある関わりの経験が、今後自分が大きくなった時同じように関わられると思った。
  - ・保育士の仲立ちの中で遊ぶうちに、人との関わり方を知り、友達と一緒に遊ぶ楽しさを知らせることができる。また、子ども達自身でも楽しさを感じた。
- \*＜決まりを守って遊ぶこと大切さ＞を学ぶ。
  - ・ルールのある遊びをすることで、ルールを守ること大切さを知らせることができた。
- \*＜発達を見据えた活動方法＞を学ぶ。
  - ・各年齢同じ遊びをすることで、各年齢に合った話し方、進め方、接し方、遊び方があること。各年齢にあわせて進めること大切さを知る。保育士自身がその遊びに対して、研究を深めていく必要があると感じた。
  - ・0歳から6歳児まで年齢に大きな差はあるものの、遊びの方法、援助の仕方次第で年齢を問わずに楽しめると思った。
  - ・小さい子どもでも見よう見まねでやろうとする姿には感動した。
- \*その他
  - ・月ごとに遊びの内容を変えていく中で、子ども達の好きな遊びは友達同士競い合える遊び（特にジャンケン列車）が人気で、クラスの中で何度も行い盛り上がっていた。
  - ・「人は一人で生きていけない。人の支えがあるから生きていける」  
その根本となる人とのふれあい、心のつながりが実感できる遊びであることを学んだ。  
ふれあい遊びを通して、人とふれあう事の心地よさをたくさん感じて、時には嫌だと思  
う感覚も大切にしながら、人との距離感を計り、自分の望む人間関係を築いていけるよ  
うにしたいと思った。

## 4 考察

### 1) 共感すること

幼児期は人間関係によって成り立つ社会に初めて踏み出す時期といわれている。この数年来の保育現場を見ると、5・6か月頃の乳児が保育園に入園してくることが多く、家族以外の人との触れ合いが早期化し、多様な社会的関係を結んでいる。寝返りをし、ハイハイをし、立って歩けることで活動範囲が広がる。二項関係から三項関係となり物や人に対して興味も出始める子ども達にとって、人や物の関係性をより深くしてくれるのが「遊び」ともいわれている。遊びの発達には対人関係の視点から見ると、「一人遊び」「傍観」「平行遊び」「連合遊び」「共同遊び」へと発展する。「共同遊び」には、役割やルールがあり、自己抑制と自己主張の2側面が社会性の発達に重要な関わりを持つとしている。<sup>(註6)</sup> 子ども達はこのような遊びを通して身体の発達や運動機能の充実を図っている。

保育をする中で子どもが遊びを楽しんでいる状況を振り返ってみると、「もう一度、もう一度」

と何度も飽きることなく繰り返す遊びがある。ふれあい遊びにおいて『じゃんけん列車』がその一つである。子どもは繰り返す中で遊びを知りつくし、友達同士で遊びを共有して楽しんでいる。それに加えて保育者も一緒になって楽しむ。この状況は、遊び本来の楽しさと併せて一緒に楽しんでいる友達同士の触れ合いを心地よく感じ、「やってみよう」と思う気持ちがより一層膨らんで継続していると思われる。この遊びの中にも勝ち負けがあり、負けた時の悔しさや勝った時のうれしさを体験している。その他、鬼ごっこなどいろいろな遊びの中にはルールがあり、ルールに沿って友達と楽しさを共有する。そのためには我慢することも大切である。まさに「生きる力」を少しずつ子どもなりに育てている。このことは、子どもだけではなく、一緒に楽しんでいる保育士にも感じられたようである。学びの中で、「『人は一人で生きていけない。人の支えがあるから生きていける』その根本となる人とのふれあい、心のつながりが実感できる遊びであることを学んだ。ふれあい遊びを通して、人とふれあう事の心地よさをたくさん感じて、時には嫌だと思える感覚も大切にしながら、人との距離感を計り、自分の望む人間関係を築いていけるようにしたいと思った」としている。このような保育士の気持ちが子どもにも伝わり、お互いに「共感」し合う関係性ができたようである。しかし、「共感」し合う関係性は、すぐに構築されるわけではない。遊びにおいても継続すること、繰り返して行うことが大切と思われる。継続的に遊ぶ。「観察するまなざし」ではなく「横並びのまなざし」で一緒に楽しむ。<sup>(註7)</sup> この行為は、「共感」し合う関係性だけではなく様々な育てたい力も身につけ、その一つである集中力も身につくであろう。その活動の中には常に保育士の工夫があり、見通しを持った計画性のある遊びを通して獲得できると考える。同年齢によるクラスごとの取り組みや異年齢同士の関わりは、子ども達だけではなく保育士においても学ぶことが多かったようである。

## 2) 集団への導き

今、保育園や幼稚園では延長保育(朝7時から夜19時、12時間開園)や預かり保育などの特別保育が実施され、子ども達が施設で過ごす時間は大変長い。また、子どもの年齢も低年齢化し、保育園で6年間過ごす子どもも多くなってきている。時間が長ければ長いほど保育者との関わりも多くなり、保育の質だけではなく保育者への配慮も大きな課題となっている。

乳幼児期において性格の核は作られ、大人は子ども時代の結果であるとし、家庭の安心かつ個性的なあり方と保育園の集団的なダイナミックな生活との絡み合いで子どもの力がついていく。そのために「好奇心」「安心感」「感動する力」「自分の頭で考える」「生活者としての自立」など、5つの生きる力のチェックポイントを基に子育てをしていく必要があるとしている。<sup>(註8)</sup> 乳幼児期の子どもの育ちは将来をも左右するという事は、生活を共にする保育者にとっての役割は重い。年齢ごとの発達の差が一人ひとり大きいことを考慮に入れたうえで、個々の子どもの実態を踏まえた集団指導の内容・方法のあり方を常に考えていく必要がある。また、子ども達が置かれている家庭の状況も把握しながら、保護者への支援も忘れてはならない。この集団への基本的指導の進め方として、1次の指導として自分でできる力を育てる。2次の指導として友だち同士で支える力を育てる(SOSを出すことができる)。3次の指導として先生を専門家中心となって支える。このように多層的ニーズで子どもを育てるとして、個々の指導を大切にしながらも集団への指導へと内容を深めることがより大切であるとしている。<sup>(註3)</sup> このような集団指導体制の中で個々の活かし方を体験させ学ぶことが自立させていくための一つの手立てであるとしている。保育者は経験の浅い子ども達に生活の中から多くの体験を積み重ねることが役割であろう。

## 5 今後の課題

ふれあい遊びとして、平成26年度はよりクラスにおける活動を重点的に考え実践してきた。結果的にはそれぞれの年齢を考慮した遊び方法を検討し活動を楽しむことができた。今後の視点として、0・1歳児はルールが難しい遊びに対し、子ども達が楽しめるよう、いかに保育士が遊びを工夫し子ども達に提供できるかを考える。2歳児は遊びが理解できるよう保育士が工夫していく中で子どもが内容を掴み、楽しめるようにしていく。3歳児は友達に目を向け、相手の気持ちを考えられるようにしていく。4歳児は遊びを更に浸透させ、楽しむ。また、年長児に向けて自分達で考え、作り上げる楽しさを得られるようにする。5歳児は鬼ごっこのように、自分たちでさらに遊びを展開させ、楽しめるようにする。とそれぞれ年齢ごとに継続的に実践するための課題も残った。

今後、保育者として子どもの発達の道筋を理解し、見通しを持って保育にあたることが大切である。発達の連続性を考えた時、園として共通の活動を計画に入れ、年齢を問わず楽しめる活動内容や方法も常に取り上げ、実態に沿った保育を実践していきたい。

## 註

註1)

\* 「人間になれない子どもたち」

ひたすら快適で便利な暮らしを追い求めた結果、現代文明の副作用が見られる。体力的には背筋力の低下（育児・介護への危うさ、姿勢の悪さ）、テレビやビデオなど映像機器による視力の低下、自律神経の異変（血圧調節）などがみられる。精神的には学級崩壊・登校拒否・いじめ・暴力など社会現象として問題視されている。また、家庭における教育力は薄れ、「生産の単位」から「消費の単位」となってしまったという。今後、「子どもの最善の利益」の保証、安心できる子育ての拠点作りなど、子育て・子育ての場を確保が必要としている。

\* 「おかしいぞ 子どものからだ」

子どもの健康問題についての全国的な追跡調査を行い、統計的にデータとして報告している。子どもの体の「ワースト5」として、①子どもの肩こり、②夜型によるフクロウ症候群、③食事の影響による歯並びやかみ合わせの悪さ、④よく転び、転んだ時に手が出ない（筋肉感覚やバランス感覚の低下）、⑤両方の目で物を見ていない（立体視機能の低下）と指摘した。急激な豊かさの代償としての発達不全は、今後「子どもの権利条約」に基づいた取り組みを具体化させることを必要としている。

註2) 「小1プロブレムを防ぐ保育活動」

乳幼児期から小学校期にかけての接続カリキュラムの開発や保育支援システムの構築がなされていないのが現状であるとし、保育活動と教科学習を比較検討しながらスムーズな移行を目指した活動を提案している。小学校で必要とされる長時間の着席行動と集中力・持続力、板書されたものを書き写す空間認知能力、教科学習の知的能力、コミュニケーション能力、集団への適応能力などを幼児教育における5領域の保育内容と関連させて具体的に紹介されている。

註3) 日本臨床発達心理士会 第11回全国大会企画シンポジウムにおいて、栗原慎二氏は「誰もが行きたくなる学級・学校をつくる ―これからの生徒指導・教育相談・特別支援をデザインする―」の講演の中で、1980年前後においては高校、1990年前後においては中学校、2000年前後においては小学校が荒れ、2010年前後では家庭まで及び育児放棄などの現象が起きている。この問題に対して現場や行政などいろいろ施策を講じているが、個々に行き過ぎる傾向があり集団としての育ちが必

要である。また、専門家への連携も大切であるが、現場の教員一人ひとりに力を身につけさせる研修を行うことなどが必要であると提案された。子ども達の〈集合〉を〈集団化〉させ、そこで社会性を身に付けさせるなど環境に優しい、思いやりのある人づくりが大切であると、自分自身の実践事例を下に提案された。

また、セミナー【子ども・子育て支援新制度と現代社会の課題】において、村井琢哉氏は「子どもの貧困への支援の実際と課題」の講演の中で、6人に1人の割合で相対的貧困の状態の子どもがおり、虐待の要因にも大きく影響している。不自信・不安感、孤立・排除、低学力・低学歴、低い自己評価など負の状況を支援し、「傷がつかない社会」を目指していかなければならないと、支援活動〈親子劇場運動〉など実践活動の中から提案された。

註4)「れんげの布団 気持ちいいね 一年齢をこえたかかわりのなかで―」

註5) 岐阜聖徳学園大学短期大学部 紀要第44集

《園内研究を通して保育を考える ―5年間の「運動遊び」の取り組み―》 p31～p49

註6)「脳科学からみた機能の発達」 第10章 対人関係 Ⅲ幼児期 p192～p195

遊びの発達には対人関係の視点から見ると、2歳ごろまでは他の子どもと関係を持たず、一人で遊びに熱中する「一人遊び」、他の子どもの遊びを見て遊びに加わらない「傍観」、一緒に遊んではいるが干渉しない「平行遊び」、一緒に遊ぶが分業（役割分担がない）をしない「連合遊び」、目的を持って一緒に遊ぶ「共同遊び」と発展する。「共同遊び」には、役割やルールがあり、自分の欲求を抑える自己抑制と自己主張があり、この2側面が社会性の発達に重要な関わりを持つとしている。幼児期に見られる社会性の一つ「向社会的行動」は「おもいやり」に基づく行動であり、思いやりの基盤ともいえる「共感」も2歳児ごろの子どもにも見られ、他者理解などの認知発達に伴ってより広汎なものとなっている。

註7)「共感」

発達に関係の中 ― 共感的かかわりの中で生まれるとし、発達するというのは関係性の広がり ― 関わる世界の広がりにあるとしている。生後数ヶ月の乳児でも他事への関心を持っており、自ら相手に対する興味を示すことが明らかにされている。集団保育の場では子ども同士の間関係は個から仲間との協調に向かうと考えられ、乳児期から2歳ごろまでは一人ひとりが自分のしたい遊びに十分取り組める環境づくりが重要である。そして3歳ごろになると少しずつ他児への関心も高まってグループで遊ぶ姿も見られるようになり、それぞれの意見を調整することの難しさを体験しながら、だんだんと一人でいるよりも友達と遊ぶ方が楽しいと感じられるようになると考えられている。また、岸井の保育者としての「技」や「腕」の理論を取り上げ、「それを活用する保育者自身の人間性の豊かさや幼児の気持ちを深く理解することが裏付けになって初めて生きる。つまり、関わる子どもの立場に立ち、一緒に考え、喜びや楽しみを分かち合い、時には悩みながらも解決方法や新たな発見を味わう姿勢が必要不可欠」である。そして、保育者の専門性は日々の実践を「省察」し、子どもや仲間とも対話し学び合うことによって高めていける。そこには共感的他者の存在が大きいとしている。

註8)「子どもの心の基礎づくり」

子どもの将来の性格の核は子ども時代に作られ、大人は子ども時代の結果であるとし、生活者として自立するための5つの生きる力のチェックポイントとして、①好奇心が育っているか。人間の最も基本的な力であり、下界に働きかける行為の最初の行為のカギでもあり、持続することが集中力のはじまりとしている。そのためには物と指示を与え過ぎないようにする。②安心感が子どもの



性格をつくる。家庭が安心感の場であるとし、勇気は安心感のある場所で生まれる。③感動できる子どもにする。心を豊かにすること、人と感情を交流させること、それぞれ体験の違いはあるものの共通しているのは自分を愛し、自分を好きになれることが大切である。④自分の頭で考える子どもにする。教えられた知識は消えるが体験した学習内容や方法は脳に残り知的な性格の基礎をつくる。⑤生活者として自立させる。生活リズムの5つの定点として、朝の起きる時間、三度の食事、寝る時間を上げ、動かないことなどを上げている。①・②・③をからみ合わせて精神力が創られる。そして、家庭の個性的なあり方と保育園の集団的な生活とのからみ合いで子どもの力がついてくる。改めて、「人間と自然が子どもを育てる」という、子育て・子どもの育ちの原点に戻り、我々大人は考える必要がある。

註9)「小学校までにつけておきたい力と学童期への見通し」

就学前までにつけておきたい力（接続期の力）として次の2つの力をあげている。『学習に繋がっていく力』として子どもに「できる力」ではなくて「分かる力」をつける。また、『生活面』においては「課題に集中する力」と「生活の流れを身に付け見通しを持って生活する力」が必要と言われている。集中できない原因として、ADHDが疑われる場合、テレビを見ながら食事をするなど生活にけじめがない場合、体が育っておらず筋力が弱い（姿勢が悪い）場合、食生活の問題、規則正しい生活など考えられるとし、原因を探り、保育者としての課題を明確にすることが大切とする。また、規則的な生活習慣を身に付けることによって、子どもにも見通しを持てるようにし、受け身の「指示待ちっ子」にさせないことも大切としている。

### 参考文献

- ・清川輝基：人間になれない子どもたち， 榎出版社， 東京， 2006.
- ・正木健雄：おかしな子どもからの声， 大月書店， 東京， 2003.
- ・三浦光哉・井上孝之：小1プロブレムを防ぐ保育活動（理論編）， クリエイツかもがわ， 京都， 2013.
- ・三浦光哉・井上孝之：小1プロブレムを防ぐ保育活動（実践編）， クリエイツかもがわ， 京都， 2013.
- ・丸山美和子：小学校までにつけておきたい力と学童期への見通し， かもがわ出版， 京都， 2012.
- ・丸山美和子：リズム運動と子どもの発達， かもがわ出版， 京都， 2008.
- ・丸山美和子：発達のみちすじと保育の課題， 萌文社， 東京， 2010.
- ・丸山美和子：育つ力と育てる力， 大月書店， 東京， 2013.
- ・佐伯胖：共感， ミネルヴァ書房， 京都， 2007.
- ・石田一宏：子どもの心の基礎づくり， 大月書店， 東京， 2005.
- ・平山諭・保野孝弘：脳科学からみた機能の発達， ミネルヴァ書房， 京都， 2013.
- ・新生保育園・仲野悦子・後藤永子：れんげの布団 気持ちいいね 一年齢をこえたかかわりのなかで一， 相川書房， 東京， 2004.
- ・仲野悦子・坂井亜也子：園内研究を通して保育を考える ―5年間の「運動遊び」の取り組み―， 岐阜聖徳学園大学短期大学部 紀要第44集， p31～p49. 2012.
- ・田中浩司：年長クラスの集団遊びに見られる人間関係， 福山市立女子短期大学紀要37集， P49～p58， 2010.
- ・大倉美代子：幼児の集団遊びとしてのわらべうた 自主シンポジウム20 わらべうたの教育力

- を採る, 日本保育学会52大会研究論文集, 1999.
- ・遠藤晶・松山由美子・内藤真: 幼児の異年齢集団によるふれあい遊びにおける相互行為の検討, 武庫川女子大学紀要第58集, p23~p31, 2010.
  - ・遠藤晶・江原千恵・松山由美子・内藤真希: ふれあい遊びにおける双方向性, 武庫川女子大学大学院 教育学研究論集6号, p21~p29, 2011.

## 謝辞

この研究にあたり、N保育園の保育士の先生方に貴重な意見を頂きました。心より感謝申し上げます。

